

第五章

結論

A. 研究の結果

1. 5W+1Hテクニックを使用する前の学習者の作文能力

統計的に計算するプロセスによると、プレテストのデータは平均値が 64, 15 で、偏差値が 13, 46 である。それから、頻度分布が 41 - 55 (D) の値に中心させている。この値をもらった学習者が 8 人で、あるいは 40% である。これは「5W+1H テクニックを使用する前の学習者の作文能力が良くない」という意味がある。

学習者のプレテストの作文を見れば、学習者は言語学的な問題だけではなく、言語学以外の問題も持っている。その問題は作文の内容のアスペクトやストーリーの流れのアスペクトでできている。作文の内容のアスペクトについて、学習者は何を書くとかと言う問題がある。また、ストーリーの流れのアスペクトについて、学習者は考え方がしっかりしなかったり、ストーリーが構造的にうまくなく行ったりする。

2. 5W+1Hテクニックを使用する学習者の作文能力

ポストテストのデータを計算するプロセスによると、プレテストのデータは平均値が 85, 20 で、偏差値が 9, 86 である。それから、頻度分布が 66-80 (B) の値に中心させている。この値をもらった学習者が 10 人で、あるいは 50% である。これは「5W+1H テクニックを使用する前の学習者の作文能力が良い」という意味がある。

学習者のプレテストの作文を見れば、プレテストの時見つけた問題が少なくなっていた。特に、言語学以外の作文の内容とストーリーの流れの aspek における問題である。でも、言語学の言葉とか文書の aspek には、プレテストの時のような問題がまだ見つかった。

3. 5W+1Hテクニックを使用する前とそのテクニックを使用する学習者の作文能力の違い

学習者は 5W+1H テクニックを使用する前とそのテクニックを使用した後と作文能力がどう違いのあるのを知るために、統計的にテストのデータを分析していた。その分析の結果に基づき、研究の仮

説は成功すると言える。つまり、書くテクニックの5W+1Hは学習者の作文能力に効果がある。

それから、その効果はスコールの $2,09 < 3,85 > 2,86$ で設定されている。スコールの 2,09 が統計の表の t 得点 5% で、スコールの 3,85 が計算した t 得点で、2,86 が統計の表の t 得点 1% である。計算した t 得点は統計の表の t 得点の二つのより高いので、5W+1Hテクニックが作文指導に効果が有意味の 1% である。

上記のような効果があったのに、この研究の結果は先行研究のヘニアテイ (2006) の結果と違っていた。ヘニアテイ (2006) によると、5W+1Hテクニックは作文の言語学の問題 (言葉と文書のアスペクト) と言語学以外の問題 (内容とストーリーのアスペクト) を直ちに効果がある。この研究の結果によると、そういうことではなく、5W+1Hテクニックは作文の言語学以外の問題を直ちに効果があるが、言語学の問題を直ちに効果がなかった。

4. 5W+1Hテクニックによる作文指導についての学習者の意見

5W+1Hテクニックによる作文指導について、学習者は次のとおりの意見を述べていた。

- a. 学習者は「5W+1H テクニックは作文の内容とかその意見を広げるのをやすくさせる」と言った。これはエルメントとヘニアティが行ったことに間に合い、「5W+1Hテクニックで含まれる要素はある書き物の内容を広げるために役に立つ」(エルメント、2005；ヘニアティ、2006)
- b. 学習者は「5W+1Hの要素と作文の話題との関係がストーリーの流れを設定に役に立つ」行った。このことはヘニアティが言ったことに似ている。ヘニアティ(2006)によると、5W+1Hの「How」と「Why」がある作文のストーリーの流れの一つの選択的なものになれる。

B. 提案

上記の結果以外に、この実験研究が行っている限り、教師は「いくつかの面白いことが起こった」と言った。たとえば；友達と一緒にいるグループで作文を書いている時に起こったこと。何人かのグループのメンバーは作文を書きに相談し合っている時、他のメンバーはその活動に参加しなかった。彼はこのような学習活動に興味のなかった。それは自分で作文を書く学習活動ととても違っていた。学習者は自分で作文を書いて学習する活動のほうが好きのようイメージのある。

教師によると、上記の問題は学習者の日本語能力の違いことに影響にされる。つまり、いい能力のある学習者はグループに役目が

き過ぎて、あまりよくない能力のある学習者はグループの活動に参加しなくてもいいという考えがあるから。それで、筆者によると、この実験研究における5W+1Hテクニックは他の書くテクニックとか方法に統一になったほうがいい。たとえば；

1. Modelling テクニック

モデルとしての作文は読解の授業で扱うテキストのほうが
いいと思う。つまり、

2. Collaborative テクニック

